

## 第2章

# 思春期の子どもへのかかわりについて



子どもたちは心を発達させていく途中でさまざまなものとの別れを繰り返して大人になっていきます。いつまでもおっぱいを飲んでいたくても、いつかは母親のおっぱいや哺乳瓶とさよならしなくてははいけません。おむつをして、大人に排泄の後始末をしてもらっていた子どももいつの日かおむつがはずれ、自分でトイレができるようになります。成長するにつれて赤ちゃんの頃に遊んだおもちゃや絵本を卒業し、より複雑な遊具や物語を楽しむようになります。そうした子どもの時代への次々の別れをくりかえすうちに、子どもたちは思春期を迎えます。思春期は、子ども時代への別れの総決算の時期です。家庭や学校の中で自分の居場所づくりの練習をしてきた子どもたちが、社会という後戻りの出来ない世界へ飛び立たなければいけない時期です。一人の人間としてのアイデンティティを獲得し、社会の荒海へ泳ぎ出る時期です。社会の中で、本当に自分の居場所が作り上げられるのか。子どもたちは不安でいっぱいです。この時期、混乱しない子どものほうが異常であると言われるくらい、混乱と葛藤の中に子どもたちはいます。大人になった私たちは、自分も通り過ぎてきたはずのこの思春期の不安や戸惑いをついつい忘れがちです。あたかも不思議の世界に迷い込んでいるかのように見える思春期の中の子どもたちに対して、家族や周囲の大人たちが出来ることを考えてみたいと思います。

## 思春期の子どもとかわるとき

### 1) 子どもとのかかわり

(子どもは、自分や他人との関係自体がわからないことがある)

自分の心の中で何が起きているのか、他人とはいったい何なのか、自分とはいったい何なのかといった「自分」探しの真只中にいるのが思春期の子どもたちです。自分が何をしたいのか、何を考えているのかさえ自分でもわからないことが多い時期です。

「何でもいいから話してごらん」と、表面的に何でも話せるようにしたつもりでも、子どもが話を出来るわけではありません。言葉に出来ないさまざまなことが子どもの心の中にうずまいていくのです。自分の身体の中で、大人になるためのさまざまな変化があらわれます。それに加えて、性の悩み、人間関係、自分の存在価値など、いろいろな問題に心が揺さぶられています。まずは、話すことが出来ないこと、混乱してばかりいる子どもそのものを受けとめることが必要です。しかし、表面的にやさしくしさえすれば、子どもがとびこんでくれるわけでもありません。本当のやさしさが何なのか、他人とは何なのかにも戸惑っているのです。形だけのやさしい声かけや激励ではなく、壊れそうな心を包み込む姿勢を大切にしてください。テクニックではなく、ただ自分そのものを迎えてくれる大人を子どもは待っています。そして心のキャッチボールをする中で、子どもたちは、他人を信じる心を育てていきます。

### 2) 親の役割 (親が抱え込むのではなく・・・)

壊れそうな心を包み込むといっても、親が子どものことを全部受けとめなければならないわけではありません。親だからこそ、受けとめられないことが多くあります。誰にも受けとめられないような子どもの破壊的な行動や攻撃的な感情そのものを無理やり受けとめる必要はありません。受けとめるべきところは受けとめ、受けとめられないことにはしっかりと歯止めをかけ、規制してあげることも必要です。

「どうしてこんなになったのか」「なぜこんなことをするのか」と子どもに対して怒りや悲しみがわきおこったり、「親がなんとかしてあげないと」「自分たちの育て方が悪かった」と親が自分自身を責めたりすることがよくあります。確かに、子どもの心の発達にかかわる親が大きく混乱させられることがあります。しかし、子ども側のいろいろな事情、親の側のいろいろな事情、お互いの心の交流を妨げるさまざまな事情によって、心が通じにくくなっていただけかもしれません。そうだとすると、お互いのコミュニケーションの回復こそが、まず必要です。

思春期の子どもたちに対して親がやさしくなりすぎたり、逆に厳しく接しすぎたり、親自身が子どもとの関係に揺れ動きます。子どもを受け入れなくてはと過保護になったり、社会の厳しさに耐えられるように厳しくしつけなくてはと、頭ごなしに怒鳴りつけたりします。ときには、普段はとてもしっかりとした親が、「思春期の子どもの不安を受けとめてあげて」と専門家の助言を受けたりすると、人が変わったかのように急に子どもにやさしくしたりします。しかし、そんな親の表面的な態度を子どもはよく見えています。思春期の子どもへのかわりはただやさしくすることでも、ただ厳しくすることでもありません。そのどちらもが必要です。厳しいのだけれども、自分のことを心ごと包んでくれている、そういう実感を子どもたちは求めています。

思春期の子どもと同じように、親の心も揺れ動きます。それはお互いが生きている人間だからです。親と子どもの心の交流が人間関係の基本だとしたら、そこには良いことばかりでなく、つらいこと、悲しいこと、自分の思い通りにならないことがいっぱいあります。揺れ動きながらも決して戸惑っている自分を見捨てることのない親こそ必要です。ときにやさしく、ときに厳しく、いっしょに悩んでくれる大人を子どもたちは求めています。もがきながら生きている自分をそのままの姿で認めてくれる親がいること。そこからコミュニケーションの回復が生まれ、思春期の子どもたちが社会に巣立つ基礎が生まれてきます。

### 3) 専門家に相談するとき

これから社会に出ていく思春期の子どもにとって、親はいわばボクシングの練習相手です。でも練習相手である親が子どもの強いパンチに持ちこたえられないときがあります。そんなときには、親の代わりになる練習相手が必要になります。それが、専門家だったり、他の大人だったりするわけです。親がノックダウンしてしまう前に専門家や専門機関に相談しましょう。けれども、決してしてはいけないのは親が専門家などの他人まかせにしまって、自分がかかわらなくなることです。痛みを伴う練習をしている子どもを外から眺めているだけでは親は単なる観客になってしまいます。社会で生きるためにはどんな痛みがあるのか、どうすれば自分のやりかたで、自分のスタイルで生きていくことが出来るのか、子どもたちはもがき苦しみながら答えを見つけようとしています。親が観客席でただ見ていたのでは、子どもたちは見捨てられたかのように感じてしまいます。親が倒れてしまうまで、自分たちだけで抱え込む必要はありませんが、第三者の観客になってしまうのではなく、苦しんだり悲しんだりしている子どものありのままの姿を受けとめながら子どもの心のそばにすることは必要です。専門家だけの力で物事が解決することはありません。子ども自身の力を信じ、親が見守りつづけることができるために専門家を利用するくらいのつもりでいてください。そばでずっと見守ってしてくれるだけで、思春期という困難な相手と闘っている子どもが勇気づけられるはずです。

### 4) 医療に相談するとき (特に、精神疾患のあるとき)

医療の専門家だけでは思春期の子どもの抱える問題に対処できないのですが、思春期はさまざまな精神疾患を発症しやすい時期でもあります、精神疾患や何らかの発達障害がある場合、専門家につなげて、きちんと治療していくことが必要になります。また、狭義の精神疾患でなくても行動上の問題や精神症状が出てくることもあります。専門的な対応をすることで、表面に出てきた症状を減らし、子どもにかかわりやすくなります。

ときとして、愛情ややさしさで子どもの精神疾患や精神保健上の問題を解決しようとしてしまうことがあります。しかし、愛情だけでは精神疾患を治すことは出来ません。多くの精神疾患の中には脳という臓器の病気としての側面があります。そのために適切な医療が必要になることも多いのです。精神科や精神疾患という言葉に拒否反応を起こし、延々と加持祈祷やカウンセリングと称する民間療法を利用する人もいます。そのため事態がより複雑困難になってくることもあります。とは言っても、親が精神医療に不安を感じ、精神科を受診しにくいことも当然です。「精神障害というレッテルを貼られてしまうのではないか」、「一生精神障害者として過ごすのか」といった心配が出てきます。しかし、精神疾患は医学的な治療によりほとんどが軽快するようになってきています。

親が抱え込むのではなく、思春期の子どもに対する適切な対応ができるようにしていきましょう。医療に直接つながることが難しいときには、保健所や精神保健福祉センターなどをうまく利用して、親の不安をしっかりと受けとめてもらうことから始めるといいでしょう。そして、医療だけで終わってしまうのではなく、医療を上手に利用しながらみんなで見守ることが大切です。

## 5) 最近の子どもたちと社会の役割

以前とは違って、思春期を過ぎたらそのまま大人の仲間入りというわけにはいかないようです。大人の年齢になっても子どもが抜け切らない、にもかかわらず、身体は大きく知能の面でも親よりもずっとかきこかたりします。それなのに、社会の中での自分の存在価値を持たず、自分自身でも本当は何をしたいのかわからなかったりします。知識や技術がすぐれていながら、現実の社会に合わせて行動できなかったりします。しかも、時にはそれは自分が悪いのではなく、社会が自分に合ったものではないからだと判断したりします。他人とぶつかりあったりするとすぐに傷つき、他人との関わりを避けてしまう人が多くなっています。その結果、大人になり、進学したり就職したりしても、自分の居場所はここではないと、いつまでも夢を追い求め、さ迷い歩く人もいます。

どうも、他人との中で傷つくことに慣れていない子どもが増えているようです。甘えることばかり上手で、耐えること、我慢することが苦手なように見えます。甘えられないと、抑うつ的になり、さまざまな症状や行動を引き起こしたりします。抑うつと言うよりも、自分がなく、空しさの中にただよっているかのようです。ふだんは自分の方から他人との関わりを避けているにもかかわらず、一方では他人に認められないとなると、見捨てられたかのようにさびしさを訴えます。傷つきたくない、誰かにずっと抱っこしてもらいたい。そうした未熟で、甘え・依存度の強い子どもたちをいかに適切に自立の方向に進めていくか。母親との関係の中で、「自分」を作り上げつつある子どもたちを、社会に飛び立たせるためには、母親と子どもを切り離し社会への道を指し示していく父親的な役割を担う家族構造が必要です。

しかし、だからと言って、「母親がもっと子育てをしなければいけない」といった視点を変えて、「父親がもっと育児参加して、社会性を身につけさせることが大切」と、父親の育児参加を決め付けることだけでは本当の解決にはなりません。母親や父親の子育てのあり方に責任を押しついたり、犯人探しをしたりするだけでは子どもたちがいきいきと生きていけることにはつながりません。子育てをしたくても、子育てが十分出来ない母親を支え、子育てに関与したくてもできない父親を支えることが大切です。地域全体が子育てをする、社会の中でひとりの人を育てていくといった取り組みが必要です。なぜなら、社会の中で息苦しさを感じているのがまず大人たちであり、その大人たちが苦しめられている社会の中に子どもたちが出て行こうとしているのです。まずは、子どもとともに生きている両親が生きづらさを感じないようになることが大切です。地域社会に、周囲の人たちに支えられることがあれば、少しでも両親が社会の中で安心して生きていけるようになります。両親が安心して生きている社会であれば、子どもたちは苦しみながらも社会に出る希望を持つことが出来るのではないのでしょうか。社会が人々のつながりをなくしている今、地域社会の人々や各種機関のつながりを密に作り、子どもの成長を支えていくことが必要です。